

# 北京官話教科書『清語会話案内』の成立過程 及びその言語の一考察

## A Study of Peking Mandarin material named ShingokaiwaAnai

王 雪\*

WANG Xue

### (要旨)

近代日本の中国語教育は唐通事時代<sup>1</sup>を受け継ぎ「南京官話<sup>2</sup>」から発足した。1876年（明治9年）から「北京官話<sup>3</sup>」に転換した。それに応じて、官立、私立のさまざまな形の中国語教育機関が生まれると同時に、必要となる北京官話教科書をはじめ学習参考書も次々と出現した。『清語会話案内』は西島良爾によって1900年に出版された北京官話の教科書である。

本論は『清語会話案内』の成立と中に収められている言語に関して論証したものであり、その成立に際して『華語跬歩』を踏襲したことを実証した。言語の面では、『清語会話案内』は北京語を標準とするとの見通しに基づいて、中国清末北京語の実態に焦点をあて、先行研究の関連成果を概観しながら、当書からみた新しい表現を検討し、程度副詞など中国清末の北京語の特質の一斑を新たに探ってみ、いくつかの用法を補充し、ある言い方は北京官話の他の資料にあっても実際には南京語に属するのではないかという疑問を提出した。また、誤訳に触れ、日本人の中国語に対する認識不足についても指摘した。最後に、西島良爾は中国語教育と中国語研究に取組んでいたことから、中国語を実用語学としながらも、言語学の研究対象ともする中国語観を持っていたと結論した。

### はじめに

中国清朝末期の北京語の研究者である尾崎實は、「『語言自邇集』<sup>4</sup>以下の北京語教科書と称されるものが、資料として有効であるかどうかの検討をまったく行うことなく、ある風潮のリアクションとして、教科書であり会話書であるというだけで、片すみにおいやられてしまったのである<sup>5</sup>。」と指摘した。北京官話のテキストをめぐっては、僅かな先行研究がみられるのみである。清末の北京語の実態を探るために山田忠司が「清末北京語の一斑—『燕語新編』を資料として—」(2003)<sup>6</sup>

と「『北京官話 今古奇観』の言語について」(2013)<sup>7</sup>を執筆した。前者は『燕語新規』を実際に話されていた北京語を反映しているものとし、その言語を太田(1964, 1969)の論考に照らし、また同時代の性格も類似している資料との比較を行って、『燕語新編』の言語が北京語であることは疑う余地が無いが、多くの点で他の資料とは異なっている事実より単に北京語と言ってもそれは均質的なものではないとの結論を出した。他に北京官話の教科書に関するものとして、「宮島大八『官話急就篇』の語彙について」(林怡州 2013)<sup>8</sup>と「官話教科書『華語萃編』の成立に関する

\* 山口大学大学院東アジア研究科 (The Graduate School of East Asian Studies, Yamaguchi University)

一考察」(松田かの子 2001)<sup>9</sup>などの論文がある。

西島良爾が1900年に出版した『清語会話案内』(以下『案内』と略)は北京官話教育の早期において、内容上も形式上も珍しく整えられた教科書である。西島良爾は生涯において中国語の教授に力を注ぐと同時に学習書の編纂にも取り組み、30年代までに中国および中国語に関連する書籍を改題再出版も含めて20点以上刊行した。その内、一番多いのは教科書である。特に、『清語会話案内』の内容は後の教科書に継承された部分が多いので、時期的に代表とされる教科書であるといっても過言ではない。また、『案内』は当時の北京語の実態をかなり忠実に反映しているため、相当な言語的価値ももっている。しかし、現時点まで『案内』に関する考察は未着手である。

このような理由で、本論では『案内』の成立過程を解明し、『案内』に載っている言語の分析を通じて、中国清末の北京語の実態を探り、西島良爾の中国語観を考察する。

なお、本論では書名・人名・地名は日本漢字で表し、引用部分は原文のままとした。

## 1. 西島良爾と中国語教育

西島良爾は、明治、大正時代の中国研究者である。1870(明治3)年11月1日、静岡県函南村で志良以(又は志良井)新右衛門の三男、染之助として生まれた。1890年、静岡県選拔生として上海の日清貿易研究所に入学し、中国語を学んだことが、彼の人生を大きく方向づけ、中国語関連図書の著述の基礎となった。上海日清貿易研究所は1889年9月に荒尾精により創立された。研究所は学科3年、実習1年の計4か年で、商業に関する学科を主とし、ほかに英語(1週6時間)、中国語(1週12

時間)も設置されていた。1894年8月に日清戦争が勃発し、研究所の卒業生89名中72名、職員7名が陸軍通訳または軍人探偵として従軍した。西島もその1人で、陸軍通訳になり、後年その体験を「従軍漫録」と題して著した。戦後は台湾総督府に勤務した。この間の1896年、西島千代と結婚して西島良爾と改名し、出身地の名前に因んで「函南」と号するようになった。1899年から1904年まで大阪控訴院及び大阪地方裁判所の中国語通訳官として勤務する傍ら、大阪で中国語教育に努めた。西島が中国語を教授していた場所は2か所あり、大阪外国語学校<sup>10</sup>と大阪清語学校<sup>11</sup>である。大阪清語学校は「支那語学堂」ともよばれ、西島が自宅に創設したもので<sup>12</sup>、清水芳吉が校長を務めていた。

1904年、日露戦争が始まると、西島は再び召集されて軍旅に従った。1905年に帰国した後、神戸に移った。教壇に立ったのは市立神戸商業補修学校に一時だけであったが、個人的に彼の中国語の教授を受けた者はいたようである。彼の長男・五一(1899-1976)の回想によれば、西島の自宅には「函南書院」という額がかかっており、毎晩、林義昌が中国語を習いに来ていたという<sup>13</sup>。林義昌は西島の大阪清語学校の学生の一人である。

西島は、後半生の大部分を過ごした神戸において、1917年に設立された神戸日支実業協会の職員となり、5年の後に創刊した機関誌『日華実業』の編纂主幹を担当した。また、遅くとも1910年以前から1917年までの間、『日華新報』の編纂に従事していた。一方、1913年始め、孫文と交際しはじめ、孫文の訪日全行程を記録した。その記録は孫文の足跡の一端を詳細に記録した貴重な資料であり、中国で最新の『孫中山全集』にもその一部が採られている<sup>14</sup>。西島はその後、孫文から「博愛」の書を贈られている。なお、長男・五一が、「孫

文は、国民政府を樹立した後も、しばしば来日している。彼が神戸に上陸するたびに、公式の席上での通訳は父の役目であった。」との回顧文を残している<sup>15</sup>。西島は1923年12月16日、肝硬変のため53歳で急逝した。

西島は表1のように、教科書（速成、一般）、時文・尺牘<sup>16</sup>、会話（商用・一般）、字典、中国事情など多種多様の中国語学習書を著した。それらは版を重ね、その出版は西島の没後も続けられた。

表1の著作を通覧すると、教科書が一番多い。後期の多数の教科書は初期の教科書の内容を若干変更し、改題し、あるいは再出版したものである。教科書の基本的な内容は、初期に刊行された『案内』と『清語教科書』にほぼ網羅されているといっても過言ではない。大阪清語学校で使用された教科書は、すべて西島の自著『案内』、『清語教科書』、『清語読本』などである<sup>17</sup>。

1902年に、中国の嚴修<sup>18</sup>が日本の教育事情を視察するため大阪を訪問した際、通訳として随行したのは大阪清語学校の校長・清水芳

吉であった<sup>19</sup>。これをきっかけに、西島は嚴修と知り合うことになった。嚴修は西島の著した教科書の評判や売れ行きに関して言及しており、1932年に出版された西島の著書『日支会話独修：三週間完成』に以下のように序文を寄せた。

日本西島函南君久客吾國 習吾國語言 比其反也 則著書以傳其國人 所著書十餘種 就中支那語教科書 日支會話六十日間卒業書等 最膾炙人口……余來大阪所遇士人 能操吾國語者 大率皆君之徒侶 其客有津者 則皆奉君著書為枕秘 則是書固甚適學者之用 可以信今而行遠無疑也<sup>20</sup>

すなわち、西島は中国に長く住んで中国語を習って、数十冊の中国語教科書を日本人に提供し、そのうち『支那語教科書』『日支會話六十日間卒業書』などはもっとも広範に伝播していた。当時嚴修が大阪で出会った中国語が話せる日本人は、そのほとんどが西島の弟子であり、嚴修の住んでいた中国天津在住

表1 西島良爾の著書

No.	著書名・出版年	No.	著書名・出版年
1	実歴清国一斑1899	18	三字経・千字文・孝経・忠経新註1910
2	清語會話案内1900	19	最近支那事情1911
3	和文対訳支那時文集1901	20	新編支那語教程1914
4	従軍漫録1901	21	最新実用支那語教科書1915（林達道と共著）
5	四声標註支那官話字典1902	22	日支会話問答 1917
6	『支那官話字音鑑』1902（牧相愛と共編）	23	支那語北京官話教範1921
7	清語教科書1902	24	支那語會話六十日間卒業1923
8	対訳日清會話六十日間卒業1902	25	日支商用會話1924
9	清語読本1902	26	日支会話助辞動詞詳解1924
10	支那現今尺牘類纂1904	27	支那語教程：四週間速成1928
11	新編中等清語教科書1904（林達道と共編）	28	六十日間卒業支那語独修：滿洲語會話1932
12	清語三十日間速成 1904	29	日支商用會話独修：三週間完成1932
13	日清會話入門 1905	30	日支会話独修：三週間完成1932
14	最新清語捷徑 1906	31	日支会話独修1937
15	新編清語教程 1906	32	標準支那語教程：自習・速成1939
16	華瀛商用會話1907	33	北京官話長髮乱記（出版年不明）
17	支那語学教科書1907		

の日本人は、みな西島の著書を宝のように大事にしていたということがわかる。

当時の三重県立四日市商業学校では、西島と林達道の著した『最新实用支那語教科書』をテキストとして採用していた<sup>21</sup>。また、近代日本において最初の日本人の編纂になる中国語辞典は、筆者の管見の限り『四声標註支那官話字典』（1902）である。このようにみえてくると、西島良爾が明治日本の中国語教育において大きな役割を果たしたことは明白である。

## 2. 『清語会話案内』の成立

『案内』は、1900年7月に上巻が、11月に下巻が青木嵩山堂から刊行された。上巻は「単語」「散語」「抄話」、下巻は「単語」「續散語」「問答」「抄話」と付録「検字」により構成されている。上巻の巻頭に、大阪控訴院長・加太邦憲による「式語九鼎」の立派な題字があり、西島の中国人の恩師・長白桂林が序文を寄せている。序文は1892年に書かれており、上海貿易研究所に在学中の西島が講義録を持参し、教師の桂林に序を求めた情景が浮かび、当時西島が既に教科書を作る意図を持っていたことが窺える。桂林が序文に「東国の西島君は博聞強記にして抄録に勤む。逐日の課程、之を集めて帙を成し、余に一言を乞ふ<sup>22</sup>。」と書いているので、西島が中国語を学んでいた時に、子細に抄録・記録していた姿が想像でき、それが『案内』の源となったのは明白である。

『案内』の下巻には、官星階が序を寄せ、「西島君は抄録したものを本二冊とし、その序文を私に求めてきた。どこを見ても感嘆を禁じえず、難しい言語を實によく勉強しているのに感心した<sup>23</sup>。」としている。自序にある「本書編纂ニ付テハ……多年師事セル桂林、馬耀

春、陳文藻、官星階、御揮肅等諸先生ノ講話ヲ蒐集セルモノニシテ別ニ予ガ一個ノ卑見ヲ以テ語句ヲ作成セルモノハ之ヲ前記ノ諸先輩ニ訂シ勉メテ其謬リナカラントヲ期シタレバ語言トシテハ稍ヤ遺憾ナカルベシト信ス」という記述から、『案内』は中国人の助言と修正をうけたことが分かる。

筆者は、『案内』の成立を考察する過程において、構成と内容の比較により、『案内』が『華語跬歩』から多く引用しているのを発見した。『華語跬歩』は御幡雅文の著書で、1886年に初版、1890年に増刊が出版され、1908年の第7版に至るまで刊行が続けられた。御幡は上海日清貿易研究所の教員であり、以前、北京に留学していた時に中国人教師から教えられたものを書き留め、同書を著し出版した。御幡は既刊版を増訂をしたいと思っていたが、1890年上海日清貿易研究所に赴任した時に1886年の初版をもって教科書とした<sup>24</sup>。同年に改版刊行した。従って、1890年にその研究所に入学した西島は『華語跬歩』の内容を学習していたはずである。

『華語跬歩』の1901年版に序文はない。1903年版には長白桂林の序文があり、その日付は1891年2月で、「既而將刊續卷。屬余校訂。其中百工庶務。罔所不該。」と記すように、御幡は校定作業に丹念に取り組んでおり、1903年版は既刊を踏まえての増刊である。従って、1901年版も1891年以前に出来たと推測される。時間的にみて『華語跬歩』が『案内』を参考にすることはありえない。

『華語跬歩』に収録された単語は15類に分けられ、それぞれの関連語句が配列してある。この形式は、御幡が東京外国語学校で南京語を学んだときに使用した『漢語跬歩』に準じているので、その書名もおそらくそれを模したのであろう<sup>25</sup>。『漢語跬歩』は編者・刊年不詳で、全体の構成は、〔複写資料1〕のように

関係することばを部と類に分けて配列する方法をとっている。これは、江戸時代の唐話の教本類にみられるものである。

『漢語跬歩』、『華語跬歩』、『案内』の3点の教科書の形式上の変化を比較するため、複写資料を下に示す。

3点の教科書の形式は、同類の語彙を縦書きしているが、『漢語跬歩』と『華語跬歩』には発音表記と日本語の翻訳を付けず、対して、『案内』は付け加えている。江戸時代の

南京官話教育において多くの単語やフレーズを暗唱することにより、大量の語彙を習得していく教育方法が、明治時代に北京官話教育に切り替わった後も受け継がれ、採用されている。しかし、北京官話の教科書には、「問答形式」の会話文という学習モデルが新しく加わり、定着した。

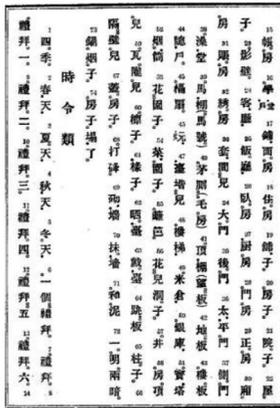
『華語跬歩』と『案内』の章立てを比較した結果を表2に示す。筆者が資料として用いた『華語跬歩』は1901年版と1903年版である。

複写資料1



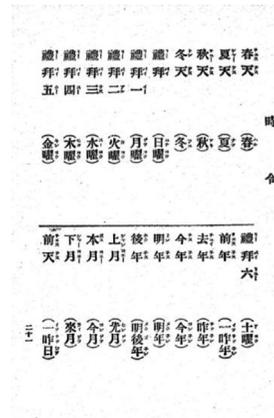
出典：『漢語跬歩』<sup>26</sup>（刊年不詳）

複写資料2



出典：『華語跬歩』（1901）

複写資料3



出典：『清語會話案内』（1900）

表2 『華語跬歩』と『清語會話案内』の比較

『華語跬歩』		『清語會話案内』	
官話音譜 官話平仄編		上巻	下巻
百家姓	天文類	第一章 單語 1-51頁	第一章 單語1-26頁
地輿類	房屋類	數目 百家姓	第一 名稱（國名、清國中央部官制、雜名）
時令類	水火類	地名及官名 天文地理	
稱呼類	舖店類	房屋 時令	第二 軍用語
身體類	飲食類	人倫職業 店舖	第三 法律語
傢伙類 附衣冠類		身體 飲食	第四 商用語
禽獸類 附昆蟲類		衣服 家具	第二章 續散語27-60頁
葯材類 疾病類		禽獸虫魚 金石藥材及病名	第三章 問答 61-106頁
貨物類 顏色類		草木花實 雜事	第四章 抄話107-167頁
散語類 續散語類		第二章 散語 52-139頁	
家常問答		短句	
接見問答 (1901版無し)		雜語	
常言類 (1901版無し)		第三章 抄話140-163頁	

形式上の相違について、複写資料をみると、両書とも各方面の用語と事柄が分類別に集められているが、構成の面で『案内』のほうが系統的であるの是一目瞭然である。『華語跬歩』には発音表記が無く、殆どの中国語には日本語の意味を付していない。それに対して、『案内』は下巻の「抄話」以外、全ての内容を統一した形式で並べ、中国語にカタカナによる発音表記と日本語の意味を付けている。「問答」の部分では、『華語跬歩』の1901年版に36話、1903年版には50話があるのに対して、『案内』にはただ19話であるが、一つ一つの会話にタイトルをつけているので、形式はより整然としている。このように、西島は『案内』を教科書としてより完備した形にして教師と学生に提供した。

内容の継承ないし増減状況について、表2で、内容に共通点のある篇名には筆者が下線を引いた。単語部分は、『案内』は『華語跬歩』の「散語」の数字の内容を繰り上げて、単語のはじめに置いている。「散語」の部分は、『案内』は『華語跬歩』を踏襲せず、指示代詞、方位詞、動詞、量詞、フレーズの順に並べている。

『案内』において、天文地理、生活飲食、商売など多岐にわたる語彙は、『華語跬歩』から拾集したものの、軍用・法律・商用の専門語は新たに補っている。これは西島自身の経歴と、当時の軍事政策や貿易上の必要性和関わっているであろう。また、『案内』は語彙の種類をより細かく分けているほか、一部の同義語の細かな変化もあり、例えば「前兒個」「昨兒個」が「前天」、「昨天」に変わっているところもある。「短句」は『華語跬歩』にある長い句の部分の一部取り出している。さらに、『華語跬歩』の「家常問答」は『案内』では「問答」と改められたが、ほぼ同じ内容である。たとえば、『案内』下巻の第三章「問

答」の、第一「帶信找人」、第二「送肉不新」、第三「商量逛街」、第四「辦事等人」、第五「托人買書」、第六「小的請安」、第七「貨價不對」、第八「逛廟碰人」がそれぞれ『跬歩』(1901)の「家常問答」の第一、六、七、三、十二、十八、十四、二十に対応し、第十九章の「外人進京」は『華語跬歩』の第三十六に対応するが、話し手は御幡から西島にかわり、会話の結末も少し変わっている。

『案内』の「抄話」の部分に『華語跬歩』の「家常問答」と同じ内容が見られるが、上巻の大部分、下巻はすべて新しいものである。そのほか、語気詞については『案内』も重点を置き、「凡例」で特別に説明している。このような教科書は利便性が高かったであろう。

なお、『華語跬歩』の翻訳版は伴直之助による『華語跬歩総訳』(1904、1907)、及び御幡による『増補華語跬歩総訳』(1910)として出版された。この2点の出版年は『案内』より遅いので、伴や御幡が『案内』を参考にしたか、御幡の訳文を伴が参考に使っていたかなどを検証するために、三者を比較してみたが、参考にした形跡は見られなかった。同じ内容の問答の一句の例を挙げてみる。

如何デス私が昨日二度アナヲ尋ネタガオ留守デシタ。私ハ此二三日マコトニ多忙デス。

— 『案内』(1900) (句点は筆者の加え)

昨日私は両度、あなたを御訪ね申しましたが、どーして、あなたは、いつも御留守でした。私は此頃大層忙しいのです。

— 『華語跬歩総訳』(1907)

何ンデ昨日ハ私汝ヲ二度モ御訪ネシタノニ、汝ハイツモ御留守デシタ。ソーデス私ハ頃日真ニ多忙デスカラ。

— 『増補華語跬歩総訳』(1910)

(句点は筆者の加え)

このように、3例は全く同じではない。『華語跬歩総訳』と『増補華語跬歩総訳』のいずれも『案内』を参考にせず、互いに引用もしていないことが分る。

以上のように、『案内』と『華語跬歩』の関係について、西島は、『華語跬歩』の1860年版と1890年版を学習し、抄写し、その内容に系統的な分類を施し、新しい内容を補い、発音と解釈を付けて『案内』を出版した。あるいは『華語跬歩』を目の前に置き参考にしたかどうかは今となってはわからないが、『案内』は『華語跬歩』を踏襲したと断定してよいであろう。

### 3. 『清語會話案内』の言語的規範

#### 3.1 北京語教科書としての『清語會話案内』

1876年4月、日本の中国語の教育は「南京語」から「北京語」に切り替わった。西島良爾は『案内』の凡例で北京官話について以下のように説明している。

清國各省至ル處語言ヲ異ニスト雖今日之ヲ大別シテ南北官話ノ二種トス蓋シ中人以上及商工者間ニ普通スルモノニシテ最モ廣ク用ヒラレ又最モ重ゼラル、所ノモノナリ本書ハ北京話或ハ京語ト稱スルモノ即チ北京語ナリ

これをみると、西島の理解では、北京官話は北京語あるいは京語とも呼ばれ、使用者の階層により更に区別があった。その2年後の『清語教科書』に、西島は「官話ノ性質」は

下に示したように風土によって異なると指摘している。

支那大陸ニ於テ言語種類ノ複雑ナル 各省至ル所特種ノ言語ヲ有シ 南北其字音ヲ異ニスト雖今日清國ノ語言トシテ之ヲ研究スルトコロノ官話ハ南北官話ノ二種ニ大別ス而シテ南北官話ハ其組織字音等略ボ同一ニシテ只風土ノ變自ラ其發音ニ差異ヲ生ジタルモノナレバ 學者既ニ其根本ヲ了得スルニ於テハ之ヲ推考スルニ難カラザルナリ<sup>27</sup>

『案内』の言語の実質を考察するために、先ず清朝の北京語について最も権威がある太田辰夫の研究を基準とし対比してみよう。太田は1969年に、7つの常用語を材料として、またそれに先立つ1964年においては項目として72項目、そして単語100語以上を取り上げ、文法的、語彙的特徴に関する精緻な研究を通じて北京語の実態をまとめた<sup>28</sup>。それは後の研究者に大きな影響を与え、基準にされ利用されている。

以下の表3と表4を通して、『案内』の言語と太田（1969）、太田（1964）の指摘した北京語の特徴を比較する。表の「合致・否」欄の符号の○は合致、×は合致せず、●は一部が合致、一部が合致せざるを意味する。『案内』の用例欄は『案内』の中の1、2例を取り出したものである。なお、文の後ろの（ ）内の「上」は「上巻」を、「下」は「下巻」を表し、収載ページを示した。

表3 太田（1969）の北京語の7つの特徴を用いた『案内』の言語の検証

No.	太田（1969）北京語の7つの特徴	合致・否	『案内』の用例
1	一人称の包括形 (inclusive) と除外形 (exclusive) を「咱們」「我們」で区別する。「俺」「咱」は用いない。	○ 「咱們」が少なく、「僂們」が多い	你要没事咱們找一个地方細細談々好不好 (下P.101) 你這程子沒有找僂們那位朋友去麼 (下P.81) 我們哥兒三 (下P.86)
2	介詞「給」を有する	○	我今兒個恭々敬々の。給您道喜來了。 (下P.31)
3	助詞「來着」を用いる	○	都在什麼地方來着 (上P.103)
4	助詞「哩」を用いず「呢」を用いる	○	人家病了。快沒指望得時候兒。雖然東廟燒香西廟禱告。那能靠得住呢。 (下P.47)
5	禁止の助詞「別」を有する	○	請您千萬別見怪 (下P.29)
6	程度副詞「很」を状語に用いる	○	我很信了 (下P.145)
7	「形容詞+「多了」で、「ずっと、はるか」の意を表す	○	光景風俗。比從前差多了。 (下P.130)

表4 太田（1964）の北京語の特徴を用いた『案内』の言語の検証

No.	太田（1964）北京語の特徴	合致・否	『案内』の北京語用例	『案内』の他の表現
1	自称の代名詞「自各兒」がある	○	他不理。只顧自各兒喝。	你各人會梳不會 (下P.89) 是你一個人去的麼 (下P.78)
2	名詞のあとに「甚麼的」をつけて「等」の意を表す	● 甚→什	上海漢口煙臺天津甚麼的 (下P.105)	なし
3	「いつ」を表すのに「多咱」「多會兒」を用いる	● 「多咱」ある「多會兒」なし	多咱開的市 (下P.94)	你幾時到的 (上P.69)
4	北京では「這程子」を用い、「這些時」を用いない	○	你這程子沒找咱們那位朋友去麼 (下P.81)	なし
5	金額を問う「多兒錢」という言い方は南京官話にはない	×	なし	①現在你是多少銀子不賣罷 (下P.77) ②多少錢買的 (下P.67)
6	北京官話には「倆」「仨」など数詞と量詞の合体した語がない	● 仨→三	我們哥兒 <sup>サズ</sup> 三 (下P.88)	
7	「～的「得」慌」は一部の心理・感覚をあらわす。動詞につきその程度をあらわす	×	なし	なし
8	起点を表すには北方では「起、解、打」を用い、南方では「從、由」を用いる	●	①我那天起天津來。(下P.50) ②打這就忙了 (下P.111)	從那兒來 (上P.68)
9	「大」を程度副詞に用いる。しかしそれほど自由には用いられない	○	①第二天。大晴了。(上P.158) ②大醉了 (上P.152)	なし
10	「すっかり」、「ぜんぜん」などの意を表す「所」がある	×	なし	
11	「準」を「たしかに、きっと」の意の副詞に用いる	○	巧了買的準便宜罷 (下P.84)	なし
12	「管保」はあるが「保管」はない	×	なし	なし

13	「敢情」「敢自」がある	● 「敢情」あ る「敢自」 なし	這棵樹怪不得不長葉兒呢。 敢情樹根兒。都叫螞蟻蛀 着了。(下P.37)	なし
14	「左不過」はあるが「横豎」は ない	×	なし	なし
15	「也許」「行許」など「許」によっ て推測をあらわすのも北方語で ある	×	なし	なし
16	類似を表す「…似的」を用いる	○	拿起來跟紙的似的(上 P.104)	なし
17	「不咖」「別咖」のごとく接尾辞 「咖」を用いる	×	なし	なし

以上のように、『案内』の北京語は太田(1969)の清朝北京語の7つの特徴とすべて一致する。太田(1964)の指摘する北京語の特徴では、17の項目のうち、半分以上が合致する。表4の10番の「所」の代わりに、『案内』では「都」を使っており、「都」は地域に関わらず常用語である。このように、『案内』の言語は清朝の北京語の特徴に合致し、北京官話を標準とする教科書であることが論証された。

### 3.2 『清語會話案内』の南京語要素

『案内』の言語の標準が北京語であることは疑い得ないが、表4に示した不一致の部分に、南京語が存在するものがある。そこで、『案内』はどのくらい南京語を採用したか、調べてみた。南京語と判断するための一次資料が少ないが、ここでは、前述した太田辰夫の結論と、『官話類編』所収方言詞対照表』(尾崎實 2007)<sup>29</sup>、及び「清代南京官話方言の一斑一泊園文庫蔵『官話指南』の書き入れ」(日下恆夫 1974)<sup>30</sup>論文の3つに見える南京語を『案内』の本文から見つけ出し、表5の中段に列挙した。その日本語解釈は、『案内』に載っていないのは筆者が加えた。

表5 『案内』にある南京語と同義の北京語

日本語	南京語	北京語
おととい	前天	前兒個
昨日	昨天	昨兒昨兒個
明日	明天	明兒個
安い	便宜	賤
見る	看看	瞧瞧
ニックネーム	小名	なし
いくら	多少錢	なし
いつ	幾時	多咱
から	從	起・打
非常に	實在・十分	頂など
文末語気詞	咯	呀など

結果として、『案内』にある南京語、或は南方語は非常に少ない。見つけた南京語は書面語に偏り、方言または口頭語ではない。そのうちの「實在・十分」と「咯」は次の程度副詞の部分で詳細に説明する。「南京語」から「北京語」へと転換する時期に際し、両方も使用されたことは当然であるが、『案内』が北京官話の資料であることは疑う余地がない。

## 4. 『清語會話案内』の北京語の実態

『案内』の言語は北京語の実態を反映しているものと思われる。本書の言語の性格を探ることで同時代の北京官話の実態を捉えることを目指し、『案内』に豊富に見られる程

程度副詞、文末語気助詞、および受身・使役を探討する。手法として、先行研究である『日本明治時期北京官話課本語法研究』（楊杏紅 2014）にある関連成果を参照しつつ行う。楊杏紅（2014）は『案内』以外に、『官話指南』をはじめ、10点の明治期の北京官話教科書<sup>31</sup>を調査対象として、程度副詞を含んだ北京官話の文法について調査している。ここで、考察対象とする語が北京語であることを確認するために、『兒女英雄伝』<sup>32</sup>、『茶館』を主とする老舎の作品を基準とし、北京語ではなければ南方語であるのかを確認するために『上海的早晨』<sup>33</sup>、『二十年目睹之怪現狀』<sup>34</sup>を資料とし調査した。老舎の作品は北京大学中国語言学研究中心のコーパス（CCL）を利用して検索した。

#### 4.1 程度副詞

程度副詞とは、形容詞あるいは心理動詞の前に置いて、その程度を表すことばである。表3の6番の「很」と表4の9番の「大」は、『案内』に多く使用されている。「大」「很」のほか、「頂」「眞」「太」「實在」「十分」「精」「齣」などもあるが、使用頻度が高いのは「很」と「頂」である。それぞれの例を挙げて説明する。

##### (1) 「很」

「很」が状語として使用される例を、表3の6番に挙げた以外に2例挙げる。

- ① 很攢倆錢（上p.156） 彼はお金持ちである。（筆者訳）
- ② 其實他很沒有錢（上p.156） 其實金ハ少シモナイ

このように、「很」が文の中で心理動詞ではなく動作動詞を修飾する役を担うのは、文法上現代中国語では通じなくなっている。太田（1969）によると、表3の6番のように、「很」

の状語としての用法は清朝の北京語の特徴の一つである。しかし、『女英雄伝』には「很使得」の1例しかみられず、老舎の作品にもたまにしか見られない（『正紅旗下』に「笑的很欠自然」がある）。これは、「很」を状語とする用法は清末の北京語では書面語ではなく口語であった可能性が考えられるが、断定するには更に論証が必要である。

その他、程度副詞として、「很」は形容詞の前に多く使われている。

如今的人都很刻薄（下p.39） 只今ノ人ハマコトニ薄情ダ

また、「很」は「形容詞+的很」の構造で、以下の例のように補語としての用法も多く見られる。

因為他鹽擱多了。齣鹹的很。（下p.53）  
彼ガ鹽ノ入レガ多イ為ニ鹽辛クテタマラヌ

この2つの用法は、筆者が調べた資料のすべてによく載っているのも、北京語、南京語に関わらず基本語または通用語である。

##### (2) 「頂」

「頂」について、太田（1981）によれば、元来は頭の最上部を意味し、また広く物の一番上のところをもさす。これが副詞となって「最」の意味に用いられるようになった。清代前期には北京語で一般的に使われることはなかったが、後期からみえるようになった。あるいは南方の方言であったかもしれない<sup>35</sup>。『案内』に出てくるいくつかの例をあげてみる。

- ① 頂胖大的（上p.108） 太ッテ居ル

- ②這眼井是頂深的呀 (上p.105) 此井戸  
ハ非常ニ深イデスカ
- ③好的雖多那些個裡頭我頂喜歡的這一個  
(上p.118) 好イノハ多ケレドモ其中  
デ私ノ望ムノハ此一ツデス

「頂」の意味を見ると、③は「最も」の意味であるのは確かであるが、①と②は「最」まで至らず「很」にあたる。楊杏紅 (2014) も、「頂」は「最」と「很」の2つの意味があるとしているため、太田 (1981) の解説に対する再検討が必要であろう。また、『清代南京官話方言の一斑—泊園文庫蔵「官話指南」の書き入れ—』で、「頂要紧」の例の「頂」を討論したときには、「頂」は南で用いられていると指摘し、共に『北京語の文法特徴』(太田辰夫)の説に合致すると論じられている。これからすると、「頂」は南京語の要素として『案内』に入っていることになる。「頂」は楊杏紅 (2014) においても北京語教科書に副詞として大量に出現していると扱われ<sup>36</sup>、『案内』の20～30年後に書かれた老舎の作品にも見られる。『案内』には多数の用例があり、『上海的早晨』、『二十年目睹之怪現狀』にも用例がある。以上から、副詞「頂」は、太田 (1981) とは異なり、清末以降、南北方言を問わず通用されていたと考える。

### (3) 「實在」

這實在可憐 (下p.75) 之ハマコトニ憐  
レダ

楊杏紅 (2014) によれば、「實在」を程度副詞として使用することは、明治期の北京官話の教科書ではあまりないか、あるいはまったくないが、『案内』には5か所以上見られる。老舎の作品においては僅か8か所にある<sup>37</sup>のに対して、『上海的早晨』、『二十年目睹之怪現狀』

には多量に使用されている。これによって、「實在」は北京より南方において通用していたのではないかと思われる。

### (4) 「太」

「太」は「很」「真」などより程度が甚だしいことを表し、「～過ぎる」を意味する。

我那個跟班的。太過於不小心。(下p.45)  
私ノアノ下男ハ不注意過ギルカラ

### (5) 「真」

「真」は「非常に」「真に」の意味である。

你想々差的真利害了。(下p.49) 汝想テ  
ゴ覽差ガアマリヒドイテハナイカ

### (6) 「十分」、「十分的」

「十分」、「十分的」を程度副詞とする例は、それぞれ1つしか見られない。

①十分討人嫌 (上 p.99) 十分人カラキラ  
ラワレル

②他在外面很好。十分的平安。(下p.43)  
彼ハ外ニアツテマコトニ好ク十分ニ安  
全ダト云フ

「太」「真」「十分」は『茶館』にも『上海的早晨』によく出てくるため、基本語と思える。「十分的」は「十分」の口語形式であるが、楊杏紅 (2014) によると、明治期のほか北京官話の教科書に、量は不明だが「十分」「十分的」がでてくる。『兒女英雄伝』、老舎の作品には「十分」が「十分的」より10倍ぐらい多く見られるのに対して、『上海的早晨』『二十年目睹之怪現狀』には「十分」が非常に多く「十分的」は全く見られない。これによって、「十分的」は北京語の口語にしか使用されていなかったと考えられる。

(7) 「怪」

太田(1981)によれば、「怪」はいうまでもなく「怪しい」「怪しむ」の意味であるが、「不思議に」「ひどく」の意に転じたものである<sup>38</sup>。

怪澁的(上p.59) 澁イ

(8) 「精」

「精」は程度副詞として「非常に」の意味で、『案内』に以下の1例しか見られない。

滯的満屋子精濕了(上p.115) 部屋中濕  
メッタ

(9) 「夠」

「夠」は程度副詞として使用範囲は、味が塩辛過ぎ、甘過ぎの場合に限られている。

因為他鹽擱多了。夠鹹了的恨。(下53)  
彼が鹽ノ入レ方が多い為ニ鹽辛クテタマ  
ラヌ

「怪・精・夠」は北京語の特色が濃く、今日でも北方のある地域で方言として使用されている。

また、北京語の特色である「大」の用例は表4の9番で示した2例だけが見られる。そのほか、「格外」「最」「越」なども稀に見られる。

日本の明治期の北京官話の教科書にある程度副詞は、楊杏紅(2014)によれば、主に「頂・很・太・挺・忒・好・越・多・怪・夠・短・稍微・略・些微・較比・一般・一邊兒・十分・非常・極其・萬分」などである<sup>39</sup>。それと対照して、筆者が調べたところ、『案内』には「頂・很・怪・十分・越」は載っているが、それ以外はまったく見られなかった。その上、「實在」「真」が一定程度使用され、また「大」「精」「夠」「格外」もごくわずか見つかっただけであった。同じ北京官話教科書であっても、載せている北京語が違うということは、北京語

といってもそれは均質ではないことを証明している。これは山田忠司(2003)の結論と一致する。北京官話の教科書の言語実態は、教科書の出典や、著者の学習背景などと関わっていると指摘できる。

副詞の使用範囲については、先行研究に対し、筆者は「頂」は南北方言を問わず通用されていたと考える。そして、「實在」は北京より南方のほうでより通用していること、および「十分的」は北京語の口語にしか出現しないことを明らかにした。

## 4.2 文末語気助詞

文末語気助詞とは、文末や話し言葉でポーズが置かれる部分について、話し手の感情や態度を表す言葉である。語気助詞は疑問、推量、命令、感嘆、呼びかけ、念押し、確認などさまざまな感情を表す。明治時代において日本人が学習した北京官話は口語であるので、語気助詞が非常に多出することが予想される。『案内』には予想に違わず語気助詞が容易に見つかる。

上巻の「凡例」で、西島は、文末語気助詞はとくに「初學者ノ注意スヘキは語尾ニ付スル詞氣ナリ」とし、以下のように説明している。

麼(來了麼、來タカ、疑問詞ナリ)  
呀(該當的呀、當ニ然ルベキモノナリ)  
罷咧(不爽罷咧、爽ハザルノミ)  
呢(這準兒呢、之レハ正確デショウナ)  
罷(來罷、才出デナサイ)  
了(完了、終リマシタ)  
的(我的、私ノ若クハ私ノモノ)  
哪(吃着藥哪、藥ヲ食ベマスルヨ)

本論では西島に従い、これらを語気助詞として論じるが、「的」については異論を提出

しておく。「的」の性質について、文法学者たちは歴史上さまざまな見解を出している。文末で語気を表す機能があるのは事実であるが、上記の「的（我的、私ノ若クハ私ノモノ）」のばあい、実際には、「的」は語気助詞ではなく、構造助詞である。上記の「我的」は、たとえば「我的書」の被修飾語「書」を省略し、連体修飾語だけで名詞句としての意味を表したものと見ることができる。たとえば、

那是個俗字字典上沒有的。(上p.89) 之  
レハ俗字デ字引ニモナイ

である。しかし、「是」と呼応して断定を表す用例がもっと多い。2例を挙げる。

- ①我想是黃泉路上沒老少的。(下p.33)  
私ガ思フニ黃泉ノ路ニハ老少ノ差別ガ  
ナイ  
②真是白手成家的。(下p.28) 眞ニ空手  
デ儲ケダシマシタ

実際に、「凡例」で書き並べているもののほかに、『案内』にはまた「啊」「來着」も多数使用されているが、「咯」は1例だけみられる。「來着」の用例は表3の3番に掲載したので、「啊」と「咯」の例を挙げる。

- ①你怎麼這麼貪心不足啊。(下p.60) 汝  
ハ何故コンナニ貪テ足ルコトヲ知ラナイ  
ダ  
②鬍子都白咯(上p.75) 髭ガ皆白クナッ  
タ

「咯」は、『案内』のみならず、楊杏紅(2014)が扱った明治期の他の北京官話教科書にも稀にしか出ていない。しかし、北京官話教育が日本に発足した時の最初の教科書である『語

言自邇集』には大量に出てくる。その理由は、『語言自邇集』の著者であるトーマス・フランシス・ウェードが長期にわたり中国南方で生活し、実際に南京語である「咯」を採用したためである<sup>40</sup>。

『案内』には、現在一般的に使われている語気助詞「嗎」は見られない。太田(1981)によれば、是非疑問(肯定か否定かを問う)を表す場合、宋代になると「麼」が用いられるようになり、「嗎」が使われるようになったのは清代である<sup>41</sup>。これにより、北京語では「麼」が相当多く使われていたのに対して、「嗎」が出現しても、北京語によく吸収されていなかったと推測される。

楊杏紅(2014)によると、明治期の日本の北京官話教科書に出ている主な文末語気助詞は「麼・罷・呀・哪/呐・咯・了・罷咧<sup>42</sup>」である。『案内』も大体同じであるが、筆者の調べたところ、「呢・的・啊・來着」も入っている。

#### 4.3 使役と受身

使役を表す場合、筆者の調べたところ「叫」のみが使われていた。2例を挙げる。

- ①我們老爺的意思就是留那倆舊家人叫我們這幾個人另找事罷。(下p.75)  
私共旦那ノ考ヘデハアノ二人舊イ家來  
ヲ残シ私共ニハ別ニ仕事ヲモトメサス  
ル積リデス  
②真是叫我沒法子深不的淺不的。(下  
p.54) 眞ニ私ハドウシテ好イカ分カ  
ラナイ

受身を表す場合でも「叫」を使うのが一番多い。「給」は以下の3例のうちの③の1例しかない。

①這棵樹怪不得長葉兒呢。敢情樹根兒。  
都叫螞蟻蛀着了。(下p.37)

此ノ木ノ葉ガ長クナラナイハ不思議デ  
ナイナノーニ樹ノ根ヲ蟻ガ食フタカラ  
ダ

②在戲館裏扶我起來的那個人。準是個小  
絡。叫他偷了去了。(下p.112)

芝居小屋で私を助け起こした人は、  
きっと泥棒で、彼に盗まれてしまった。  
(筆者訳)

③給小絡偷了去了(上p.77) 淘兒ニス  
ラレタ

李焯(2004)の調査によると、1890年代以前の北京語では、「給」が受身を表すのは稀な用法であった<sup>43</sup>。『案内』にも1例あるだけである。楊杏紅(2014)によると、明治期の北京官話教科書では、「叫」を以て受身を表す比率が高いが、「被」はただ少量使用されている<sup>44</sup>。『茶館』を調べたところ、受身を表す言い方として、「叫」は12か所あったが、「被」は3か所に見られるのみであった。これに対して、『兒女英雄伝』では受身をほとんど「被」によって表し、「叫」の用例は見られない。この理由は考察する必要があると考える。

「叫」は使役と受身とに両用されるが、文の形からみれば、受身の場合は「叫～了」という文型に即している。しかし、現代語では、使役と受身は同じ形式であるといって差し支えない。使役と受身が同形式であるのは現代語あるいは白話<sup>45</sup>に特有であって、古代語にはない<sup>46</sup>。

以上のように、西島が編纂した教科書『案内』の北京官話を反映している価値を利用し、そこに使用されている程度副詞、文末語気助詞、使役と受身の表現方法を明らかにし、同時代の他の北京官話教科書の状況と対照して、特に程度副詞の場合に一致しないところ

を多く発見した。調査を通じ、先行研究と一致しないところを指摘し、更に程度副詞と文末語気助詞に対して補充を行い、「頂」については先行研究に異論を提出した。

## 5. 『清語会話案内』の誤訳

西島は中国語を母語とする中国人ではないため、自身が使い慣れている母語の語彙や文法などが本の訳文に反映している。これは19世紀末から20世紀始めの日本人編纂の中国語学習書のひとつの欠点であろう。以下に、誤訳の例を挙げる。左側は中国語、右側は西島の日本語の解釈である。

(1) 娘兒們——娘

例：他們家的那個娘兒們。是個好吃懶做的。  
(下p.34) 彼ラノ娘ハマコトニナマケ  
モノ

「娘兒們」は方言として女の意味であり、軽蔑の語感を持っている。日本語の「娘」には「親子関係における女の子、未婚の女性、娘分」など<sup>47</sup>の意味があり、「娘兒們」とは異なっている。

(2) 沒王法——仕方がない

例：有人溜進門來。把我的東西偷了好些個  
去了。咳。越發沒王法了。戴着老爺兒  
就鬧賊。(下p.42) 人ガ門ヲ這入テ来  
テ私ノ品物ヲ澤山盜テ行キマシタアイ  
愈々仕方ガナイ日ノアル中カラ賊ガ鬧  
グカラ

「王法」は「国法/人を捕らえる時に使う道具<sup>48</sup>」という意味で、「沒王法」は「法律あるいは道徳を無視したり違反したりこと」であり、後ろの「戴着老爺兒就鬧賊」は昼間にあっても盗みを働くことをさすので、「沒王法」も泥棒を批判することである。「仕方がない」は「やむをえない」または「理不尽な事態に

直面し肅々とその状況を受け入れながら発する文句の意味を指すので、「没王法」と異り、誤訳である。

(3) 吃饱了——食べ過ぎた (上p.59)

「吃饱了」は「もういっぱい・満足するまで食べた」の意味で、「過ぎる」まで達していない。

(4) 明兒——あした

例：問：你門家裏養活巴兒狗沒有 汝ノ家  
テハ犬ヲ飼テ居ルカ

答：我家裡有三只呢 (中略) 私ノ家  
ニハ三疋アリマス

問：明兒再下的時候兒尋給我一個 明  
日マタ来ル時ニ私ニ一疋呉レルカ  
尋ネテ下サイ

答：等明兒有了我和我媽給你要一個(下  
p.90)

明日私ガ母ニアナタガ呉レト云  
フタト云ヒマショー

この場面では、「明兒」は「翌日」ではなく、「将来のある日」の意味である。これは現代の北京語では一般的に使われている。

ここで挙げた誤訳は確認できた一部のみである。また、意味を狭く解釈することもしばしば見られる。たとえば、

土——塵埃 (上p.17)

である。「土」は「土、ほこり、土地」など<sup>49</sup>を指し、「ほこり」の意味を含んでいるのは当然であるが、「ほこり」と同義語ではなく、「ほこり」と訳せば範囲がごく狭くなってしまふ。

このような誤訳、または不適な翻訳が生じたのは、文字をそのまま翻訳したのが主因であろう。また、「娘們兒」のような方言を把

握していないことも原因の一つである。誤訳も文法の混用も、規範が定まっていない時代の中国語教科書の普遍的問題であろう。

## 6. 西島良爾の中国語観

西島良爾の中国観は彼の恩師荒尾精の忠実な信奉者であるところから生じていると考えられる<sup>50</sup>。即ち、基本的に、興亜策のもとに中日の富強を求める視点である。しかし、中国語教育活動を続けた西島は中国語に対してどのような中国語観を抱いていたのであろうか。

中国語へ踏み出す理由について、『案内』の自序では、「日清比隣唇齒相依利害ノ鍵鎖リ得失ノ關係存ス我邦人タルモノ豈其語言ニ通セスシテ可ナランヤ」と、西島は述べている。これは彼の中国語教師である御幡の論説と酷似している<sup>51</sup>。すなわち、中国語への関心の出発点はその実用性である。一方、『最新实用支那語教科書』の序文では「善隣ノ誼ヲ敦フシ提挈輯協ノ實ヲ擧ント欲セバ語言ヨリ先ナルハ莫シ語言ハ實ニ國交ノ連鎖ナリ孔子曰ク國ニ入りテハ禁ヲ問ヒ郷ニ入りテハ俗ヲ問フト若シ夫レ語言ニ通曉セズンバ焉ゾ其情誼ヲ悉クス得ンヤ」と述べ、中日両国の友好の架け橋としての中国語の必要性を説く。周知のように、近代日本において、主として外交的・商業的・実利的・軍事的な実用目的のために、中国語教育がなされていた。このように、西島は中国語が貿易と善隣のために必要であるとの認識を以て中国語へ関心を寄せた。

実用的な中国語教育の場にあつては、教師も学習者も、科学的教育の必要を自覚していなかったのは一般的である。しかし、西島の中国語への実践はそのような大勢とは対照的である。まず、著書の体裁からみると、『案内』

は『跬歩』より中国語の語彙や語句に対する日本語訳を増やし、『清語教科書』は『案内』より文法略説や応用問題などを増やし、基本文例に和訳演習や清訳演習を効果的に組み合わせることによって、学習者にとって有益なものを作り出そうとする意図が窺えるとともに、中国語への探索も教科書の科学性に反映されている。また、著書の範囲からみると、発音辞典の『支那官話字音鑑』と文法解説『日支会話助辞動詞詳解』<sup>52</sup>の発行は、西島の中国語の研究が発音、文法などの分野に及んでいることを示す。『支那官話字音鑑』の緒言に、「清語學ニ関スルノ著書近來稍ヤ其數ヲ加フ然レドモ清字音ヲ正確ニ速知スルノ書物ニ至テハ甚ダ稀寥ヲ覺フ清語學者ノ遺憾トスルトコロナリ」との記述があるように、中国語に語学として関心を示していた彼の態度は注目しに値する。『支那官話字音鑑』は僅か43頁であるが、日本で最初に出版された中国語の発音辞典『日清字音鑑』（1895年）<sup>53</sup>より1,000字ほど多い<sup>54</sup>。『支那官話字音鑑』（1902）が出るまでの間、発音辞典はこの1点しかみられない。更に、彼の俗語と時文に関する研究論著も屢々世に提供された。西島が中国語の科学的な教育を実行しようとして多くの著作を世に出した業績の背景には、彼が実用語の範疇を越え、言語学の研究対象として中国語を扱っていた自覚が窺える。

中国語学習法については、西島は『案内』の緒言に「語学の第一の要務は実地に活用すること」と明確に記述している。さらに、言語は歴史・風俗に由来するので、歴史、風俗、習慣を研究することを力説している。『新編中等清語教科書』の序にも「言語を習得するためには活用が肝心であり、活用の巧みは暗誦と練習にある<sup>55</sup>」とある。この実地で活用する方法は現代でも通用する。

以上のように、西島の中国語観は、外交的・

商業的な実用的な目的で出発したが、その後、中国語への探索を停滞することなく、言語学の立場に立って、中国語の発音、文法などの知識、および学習方法の研究を積極的に進めたのである。

## おわりに

本論は、中国語の学習者・教育者としての西島良爾の生涯を手がかりとして、その著『清語会話案内』が『華語跬歩』を踏襲して成立したことを明らかにした。『案内』は編纂過程において、『跬歩』を踏まえつつ、形式上も内容上も外国語教科書の備えるべき要素を追加していったことが明らかとなった。

『案内』の言語の全体の基準と実態を明白にし、そこに載せられた語彙が太田辰夫が挙げた清朝北京語の特徴とよく合致すると結論したことを通し、『案内』が北京語を基準に編纂されたことが実証された。しかし、南京語も少量含まれているのが実態である。

『案内』を清朝の北京語資料として、程度副詞、文末語気助詞及び使役・受身の表現方法の性質を析出するために、楊杏紅（2014）などの先行研究に基づき、明治期の他の北京官話の教科書と相関する状況と対比しながら、資料を調査した。結果として、程度副詞の「稍微・略・些微・較比・一般・一邊兒」などはまったく採用されず、逆に「實在・真・大・精・勦・格外」など先行研究に見当たらないものもあった。文末語気助詞は西島により特別に強調され、先行研究に「呢・的・啊・來着」を付け加えるなどの特色がみられた。使役・受身の表現方法は、他の北京語教科書とほぼ同じであった。これによって、北京語と言ってもそれは決して均質なものではないことが判明した。また、程度副詞の「實在」は清朝における南方語に、「十分的」は北京

語の口語に使用されていたとする推論、及び「頂」が清末以降南北方言の別なく通用されていたという異論を提出した。さらに、『案内』にある誤訳をあげた。これは時代的制約のせいで避けられないが、ある程度教科書の伝播機能により日本人の北京語の到達レベルに影響を与えた。

最後に、著書から窺える西島の中国語観に

触れた。彼は確かに実用語としての中国語から出発したが、自身の能力を生かして中国語を言語学の研究対象として扱い、積極的な研究、教授、普及に努めた。

以上が本論から得られた結論であるが、いくつの未解決の問題がある。今後北京官話の教科書により中国清朝の北京官話の実態について多くの課題を解明すべきだと思う。

## 注

- <sup>1</sup> 唐通事とは、江戸時代の長崎や薩摩藩、琉球王国などに置かれていた中国語の通訳のこと。
- <sup>2</sup> 南京官話とは南京語音を基礎とした中国語の歴史的な標準語をいう。明朝が首都を南京に定めたことで成立し、明代から清代にかけて官吏が使う共通語として使われた。本論では、「南京官話」と「南京語」は事実上南京語とさす。
- <sup>3</sup> 北京官話とは、清朝において、主に官吏及びそれらを輩出した支配層によって話された、北京一帯の発音、語彙等を基礎とした中国語。本論では、「北京官話」と「北京語」は事実上北京語をさす。
- <sup>4</sup> 『語言自邇集』は、1867年にトーマス・フランシス・ウェードによって編纂された北京官話のテキストである。それまで主流とされていた南京官話に対して、当時の英国外交官であったウェードが、ある種の必然性と意識を以って編纂したものとしてされている。『語言自邇集』は明治以降、近代日本の中国語教科書に大きな影響を与えた本としても知られている。
- <sup>5</sup> 尾崎實『清代北京語の一斑』、『中国語学論集』好文出版、2007年、p.28
- <sup>6</sup> 文教大学『文学部紀要』2003年、pp.23-35
- <sup>7</sup> 文教大学『文学部紀要』(18-1)、2004年、pp.101-114
- <sup>8</sup> 『国際文化表現研究(9)』2013年、pp.353-360
- <sup>9</sup> 慶應義塾大学『藝文研究』(80)、2001年、pp.178-194
- <sup>10</sup> 今の大阪大学と合併する前の大阪外国語大学の前身ではなく、1900年に富岡半三郎によって設立された私立学校である。
- <sup>11</sup> 清語学会・清語講習会・清語学堂とも呼ばれる。
- <sup>12</sup> 西島函南著『日支会話獨修：三週間完成』例言に「東歸以來忝居法署譯職公餘之暇 創辦支那語學堂」がある。近代文芸社、1932年、pp.1-2
- <sup>13</sup> 柴田清繼『西島函南』孫文研究(42)、2007年、

pp.30-41

柴田は西島五一「諏訪山小学校七十年」『日華月報』(第51号、1971年)を引用している。

- <sup>14</sup> 柴田清繼『西島良爾—中国語とともに生きた明治人』(馬場憲二・管宗次編『關西黎明期の群像第二』和泉書院、2002年、p.180)  
柴田清繼は西島良爾の次兄志良以喜太郎の孫の志良以孝氏と西島本人の孫の片柳和子氏より、数々の貴重な資料の提供を受けたという。
- <sup>15</sup> 柴田清繼『西島函南』孫文研究(42)、2007年、pp.30-41
- <sup>16</sup> 時文とは中国の清末から民国にかけて行われた文体である。尺牘とは、尺素(せきそ)・尺書・尺翰などともいい手紙のことである。古来中国で1尺四方の牘(木の札)を書簡に用いたことに由来する。
- <sup>17</sup> 柴田清繼『西島函南』孫文研究(42)、2007年、pp.30-41
- <sup>18</sup> 後の南開大学の創立者。
- <sup>19</sup> 『日本研究論集』南开大学出版社、2005年、p.447
- <sup>20</sup> 西島良爾『日支会話獨修：三週間完成』大阪：松浦一郎、1929年、pp.1-2
- <sup>21</sup> 西島良爾・林達道『最新実用支那語教科書』大阪：石塚書舗、1915年、p.2
- <sup>22</sup> 原文は「西島君博讀強記而勤於抄録逐日課程之成映乞余一言」、日本語の翻訳は柴田清繼(『西島良爾—中国語とともに生きた明治人』2002年)を参考。
- <sup>23</sup> 原文は「函南西島君。摘録日課。集成甲乙二卷。索叙於予。因捧其集。回環披閱。不禁觸感。竊嘆。言之不易而其功用大哉偉矣。」訳は筆者。
- <sup>24</sup> 六角恒廣『漢語師家伝 中国語教育の先人たち』東京：株式会社東方書店、1999年、pp.152-154
- <sup>25</sup> 同上p.151
- <sup>26</sup> 『中国語教本類集成』第1集第1巻に収録される。
- <sup>27</sup> 西島良爾『清語教科書』大阪清語学校蔵版、1901年、p.1(六角恒廣『中国語教本類集成』に

- 収録、東京：不二出版、第一集、第四巻、p.137)
- <sup>28</sup> 太田辰夫『北京語の文法特點』『中国語文論集』汲古書院、1995年、p.243。
- <sup>29</sup> 尾崎實『尾崎實中国語学論集』好文出版、2007年、p.361
- <sup>30</sup> 『関西大学 中國文學會紀要』第五號、1974年、p.20
- <sup>31</sup> 楊杏紅『日本明治時期北京官話課本語法研究』（廈門大学出版社、2014年）は、主に『官話指南』『英清會話自学入門』『官話急救篇』『北京官話談論新篇』『清語教科書並續篇』『官話應酬新篇』『日英漢語言合璧』『北京官話支那語獨習書』『急救篇』『日華會話筌要』を材料としている。
- <sup>32</sup> 清代の白話体章回小説。文康作。四一回。1878年刊。北京語で書かれた。
- <sup>33</sup> 『上海的早晨』は周而復により1958年に創作され、尾崎實は『『官話類篇』所收方言詞對照表』において南方語の資料としている。
- <sup>34</sup> 清代の小説、吳趸人著。尾崎實は『清代北京語の一斑』（1965）の中で本書を取り上げ南方語の標準としている。
- <sup>35</sup> 太田辰夫『中国語歴史文法』朋友書店、1981年、p.269
- <sup>36</sup> 前掲注29、p.82
- <sup>37</sup> 例えば、長編小説『无名高地有了名』には「看大家实在疲乏不堪了，他就说几句笑话，招大家笑笑，并且设法使大家轮流休息...」があり、戯曲『龍須沟』には「看她这么打里打外的，我实在难受」がある。
- <sup>38</sup> 前掲注35、p.269
- <sup>39</sup> 前掲注31、p.82
- <sup>40</sup> 前掲注31、p.149・154
- <sup>41</sup> 前掲注35、p.360
- <sup>42</sup> 前掲注31、pp.140-144
- <sup>43</sup> 李焯「清中葉以來北京話的被動“給”及其相關問題一兼及“南方官話”的被動“給”』『中山大學學報』2004年第3期
- <sup>44</sup> 前掲注31、p.183
- <sup>45</sup> 白話とは中国語における書き言葉の一種。知識人が古典を基礎として作った書き言葉であるのに対し、民間で話されている口語を反映させ、大衆にも理解できるように工夫されている。
- <sup>46</sup> 前掲注31、p.247
- <sup>47</sup> 『日本国語大辞典』第12巻、p.981
- <sup>48</sup> 同上、p.3178
- <sup>49</sup> 大東文化大学中国語大辞典編纂室『中国語大辞典』角川書店、1993年、p.3115
- <sup>50</sup> 柴田清継『西島良爾—中国語ともの生きた明治人』2002年
- <sup>51</sup> 御嶺雅文は『華語跬歩』（1908）の序文で、「日清相距一帯水耳其緩急利害關鍵在焉貿易往來得失繫焉 我邦人不通曉華語言而可得乎」と文言で述べている。
- <sup>52</sup> 今見られるのは1924年に出版されたもので、西島が1923年に急死したため、再版本のほうである。
- <sup>53</sup> 『日清字音鑑』は1895年に伊沢修二（1851-1917）により出版され、日本語五十音順に排列する。
- <sup>54</sup> 『支那官話字音鑑』には5383字（『支那官話字音鑑』p.4）、『日清字音鑑』には「四千有余」がある（六角恒廣『中国語書誌』不二出版、1994年、p.62）。
- <sup>55</sup> 原文は「語言之學唯在活用 活用之妙唯在其人學者能諳熟習練」で、訳は筆者。